

第 3 章

さまざまな販促ツール

ほか



描かれた

江戸の商人

販促ツールと商いの秘訣

商う人々と買う人々

各地の都市や宿場町などには、大店と並んで日々の生活に欠かせない食品や道具などの日用品を扱う小売の店が軒を連ねた。広場や通りは、荷を担いで売り歩く行商人－振売り－や移動式屋台、ごさを広げて商う露天商、そこに集う買い物客や物見客で賑わった。



900520



銭さしでの
支払い

袋もの類



茶道具



鰻の蒲焼

様々な商人と買い物客

歌川重政(三代広重)「写り替た市中の商人」1877年

各地の都市には近隣から様々な商人たちが集い、多くの買い物客や物見を楽しむ人々で賑わった。生活必需品の着物や履物、余暇を楽しむ茶道具や楽器、鰻の蒲焼などの食事、噺や曲を披露する芸能者まで、多様な商品やサービスが見られる。



901588



露店の商人から銭で買う

歌川広重「浄瑠璃町繁花の図 (シャモなべ屋 ほか)」1852年

右下に、銭でネズミの玩具を買おうとしている様子が描かれている(歌舞伎「伽羅先代萩」のネズミの妖術の場面から着想を得ていると考えられる)。

興行の入場料を受取る(左上)

歌川広重「浄瑠璃町繁花の図 (しいのみ売り ほか)」1852年

興行の木戸銭(入場料)を受取る人の台に、銭と銭箱とも見られる箱が描かれている。

金貨を集める女性(右下)

右下の柄杓を置いた女性がござの上の金貨を集める場面は、歌舞伎『ひらかな盛衰記』による。

質入れした鎧を取戻すため遊女・梅ヶ枝が、無間の鐘※に見立てた手水鉢を柄杓で打とうとしたところ、質受けに必要な300両が降ってきたという場面からきている。

※撞くと、この世では富を手に行うことができるが、来世は絶え間なく苦しむ無間地獄に落ちる。



900697

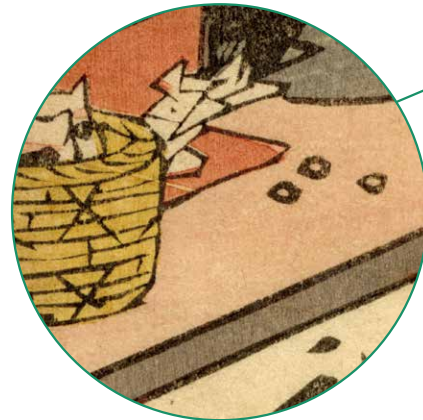
招き猫売りの僧と銭(左上)

歌川広重「浄瑠璃町繁花の図 (招き猫売り ほか)」1852年

浄瑠璃『軍法富士見西行』の見立て絵。

僧(西行)が丸べ猫※を売り、銭が置かれている。客は生き別れ遊女となった西行の娘とされる。

※浅草の今戸焼の招き猫。暖簾・提灯に○印とあり、招き猫の背中にこの模様がある。



太鼓売りの男性と銭(右下から2番目)

歌舞伎『神霊矢口渡』の見立て絵。

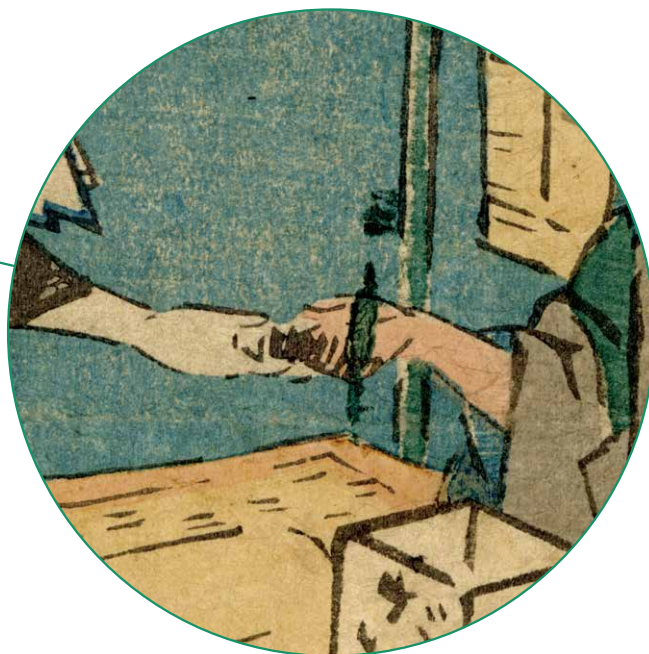
太鼓を売る台に銭が見られる。売っているのは渡守頓兵衛、客はお舟。太鼓も演目の中でお舟が打つことから来ている。



901622



901623



銭さしでござを買う(右上)

歌川広重「浄瑠璃町繁花の図 (ござ売り ほか)」1852年

銭さし(銭を紐で括った束)でござを買おうとしている様子が描かれている。

右下の傘売りの商人の手に受け取った銭、左中の鍋蓋売りから買おうとしている武士は銭を出そうとしている。



三味線の演奏を楽しむ

歌川広重「浄瑠璃町繁花の図 (瓢箪売り ほか)」1852年

左下の三味線を聞く少女の演奏に武士が財布から支払いをしようとし、その後ろの女性は銭を手持っている。



900699

実用的な販促グッズ

商売で得意先などに実生活で役立つ暦や団扇を配り、顧客の獲得や繋ぎ止めを図るケースもみられた。販促グッズとして年末にカレンダーを、暑い時期に団扇を配る現代でもみられる営業活動の淵源である。

薬売りが配ったカレンダー

松浦守義「火要鎮大小暦丁巳」1856年

富山の薬売りが行商に際し配った安政4(1857)年の暦。竈などに貼る火の用心の札の仕様で、福を呼ぶ大黒と金の成る木を描き、実用性と願いを組み合わせた仕立てとなっている。富山の絵師松浦守義の作品。幕末頃の富山の行商人の経費の記録に「錦絵代3分2朱と137文」とある(枚数の記載はなく単価は不明)。

江戸時代の暦と商人

江戸時代に使われていた「太陰太陽暦」は、幕府の天文方によって定められた。月の満欠けの周期に基づき、1か月30日の「大の月」と29日の「小の月」、また年により閏月もあり、年ごとにその配列も異なった。そのため、大小の月の配列や閏月を知るニーズがあった。特に月末に代金の取り立てをする商人は月の大小を店頭で知らせた。

酉年の暦

嘉永2(1849)年己酉の大小暦で鶏が描かれた作品。1848年の秋の行商時に配布したと考えられる。



900886



900857

富山の売薬版画とは？

- 富山の売薬人が全国の得意先へ配布した進物
- 富山でつくられた浮世絵(絵師・版元・彫師とも富山)
- 内容に店名や商品名を含まない(店や商品を宣伝する「引札」とは一線を画している。)

地元の版元

版元は十軒以上。地方都市では異例。進物商として縫針を扱う版元も。

小型でシンプル

無料で配る浮世絵のため、小型で色数も少ない作品が多い。

様々な画題

広重の風景版画を模したものと歌舞伎絵など、得意先に喜ばれる当時人気の画題が選ばれた。貨幣博物館で所蔵する売薬版画は小判や千両箱などが描かれている福神絵である。

膨大な種類と数

全国への行商で配布されたことから、江戸後期30年程だけでも、千単位の種類があり、枚数は1年で10万枚単位ではないとも言われる。



900859

参考文献：富山市郷土博物館 図録『特別展 富山の浮世絵－売薬版画』2024

呉服屋の広告

歌川国芳「団扇絵 呉服屋」江戸末期～明治初期

呉服屋が宣伝のために配る団扇に貼るための絵。暖簾に、「呉服太物類 現金かけねなし」とある。



901210



901212

呉服屋の広告

歌川国政「団扇絵 大坂屋」明治時代

呉服屋が宣伝のために配る団扇に貼るための絵。版元の遠州屋は堀江町(現・日本橋小舟町)にあった。堀江町のあたりは江戸時代より団扇問屋が多く団扇河岸とも呼ばれた。



901215

金物屋の広告

梅堂国政(三代歌川国貞)「団扇絵 江戸屋」明治時代

刃物・大工道具などを扱う金物屋が宣伝のために配る団扇に貼るための絵。

繰り返された広告のフォーマット

明治時代に盛んになった広告用の団扇絵や引札などの刷り物は店名部分の版木だけ変えて同じデザインが使われるケースが多かった。

暖簾の店名などの部分だけ異なる団扇絵



901213



901214

店名のみでも、お店の場所などが分かる人を対象に配布された。

販促ツールと地域物産

江戸時代、人々は印刷物を通して、流行の商品や販売先、地域の名産品などの情報を得ることができた。このような印刷物は、販売促進するための重要なツールであり、商人も引札(チラシ)などを通して宣伝に力を入れた。



912012

小間物屋の安売りのチラシ

「現金正札附小間物御鼻紙袋塗物類安売」(引札)

江戸下谷池之端仲町通にあった小間物問屋である日野屋忠蔵の引札。「現金正札附」「小間物御鼻紙袋塗物類」の安売りを告知し、取り扱う商品が羅列されている。江戸に限らず「諸国御土産品々」の取り扱いもあった。

引札が配られる様子

十返舎一九『金儲花盛場』1830年

江戸の盛り場における商いの風景を描いた版本。ここでは、西瓜断売り・水売・引札配・蒲焼売りが描かれている。引札配は、人気の粉白粉(仙女香)のメーカーが出した頭髪用油の引札を配布している。



905201



おしろい「仙女香」の多様な宣伝ツール

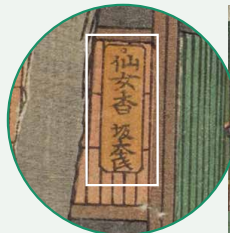
茶店・料理屋での広告看板



十返舎一九『金儲花盛場』



905201



初代歌川広重「江戸高名会亭尽 雑司ヶ谷之図」NDL蔵



「仙女香」は江戸時代に人気の粉白粉で、当時人気のあった歌舞伎役者三代目瀬川菊之丞の俳名「仙女」にちなんで名付けられたとされている。購買層の女性の目に留まるよう、茶店や料理屋に看板が掛けられた様子が浮世絵等にも頻繁に描かれた。



901567

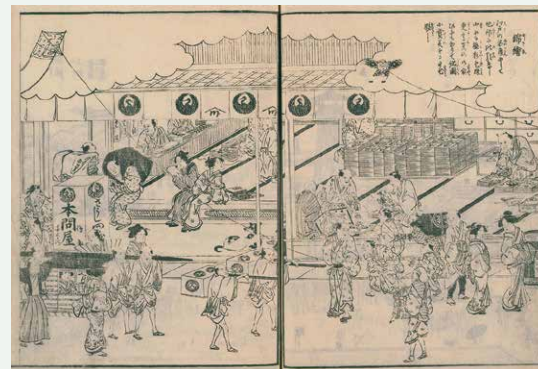
商売を通して描いた幕末の世相

「(一もんも)引なし」「(一文も)まけなし」を掲げる塗物・鉄瓶など東北の名産品を扱う売り手は、戊辰戦争で旧幕府側についた会津藩・庄内藩などを示している。

買い手は、新政府軍である土佐藩などを示し、「もつとまけなさい」などと話している。

当時、江戸では困窮した武士が身の回りの道具を売って生活していた背景も踏まえたものである。

ガイドブックで人気のお土産屋「絵草紙屋」



大伝馬町の絵草紙屋(鶴屋喜右衛門)の店前

『江戸名所図会』1 NDL蔵

絵双六に描かれた名産品

絵双六は、知識や情報を得るツールでもあった。

人々は、絵双六を通して遊びながら各コマの名産品や人気料理店の様子を知ることができた。

ふりだしには、日本橋魚市の朝市の様子が描かれている。(ふりだしにかけて、「売出し」と書かれている。)



一英齋芳艶「新版御府内流行名物案内双六」NDL蔵

チラシに見られる目を引くしかけ・工夫

店は開店や安売りを宣伝するため、チラシ・引札－を配った。

その作成にあたっては人気絵師に挿絵を依頼したり、目印となる看板の絵を入れたりすることで、人々の目を引き来店を促す工夫をこらした。



901332



901637

人気絵師のイラストで宣伝

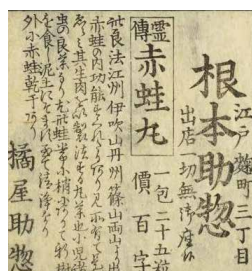
「麴町助惣引札」19世紀前半

江戸麴町三丁目にあった橋屋佐兵衛の菓子屋のチラシ。人気絵師菱川師宣の「三代目助惣繁盛図」を渡辺華山に模写させて載せることで人目を引いた。

同店名物の助惣は、小麦粉をこねて薄くのばし、餡を包んで焼いた麴焼の一種。



『江戸買物独案内』上 NDL蔵



菓子だけではない橋屋助惣
助惣で有名な麴町三丁目の菓子店では、「赤蛙丸」という薬も扱っていた。



天狗がトレードマークのハンコ屋

「版木実印師長尾幸助引札」江戸時代

大坂の版木実印師天狗堂のチラシ。店名にもなっている天狗が担ぐ屋根看板が、来店時の目印ともなりわかりやすい。



901290

大きな看板で目を引かせた薬種店

「信州東山堂看板之略図」江戸時代

薬屋は取り扱う薬の商品名を看板や暖簾、チラシに大きく表記し、来店の目印とした。

置看板：「疳積湯」(薬名)
* 置看板は店舗内の衝立型看板

柱看板：「テルカス」(薬名)
「せんきの妙薬」(疝気〈下腹部痛〉に効く薬)

めでたい図柄のチラシ



901124

長谷川貞信「萬問屋備中玉嶋西綿屋利右衛門引札」
江戸末期～明治初期



901393

二代長谷川貞信「京都 灰与店引札」

七福神が千両箱を蔵に運び込んでいる

恵比須

めでたい図柄
①宝船の本体が神功皇后札
七福神
②船上にうち6柱
③帆に大黒
(帆全体が最初の日本銀行券)
④富士山と朝日
⑤鶴
⑥波が明治初期の金銀貨



901322

「大坂 森文蔵引札」
江戸末期～明治初期

店舗の風景 日本橋北に連なる町

日本橋北側の町の商いに関わる絵画資料には、日本橋を背景にした魚市の様子も好んで描かれたが、ここでは、当館所蔵資料より、大店・越後屋前と日本橋に多かった薬屋の店前の様子を紹介する。



901580

越後屋呉服店の暖簾前を行き交う人々

歌川広重「江戸名所 するが町」1850年代

江戸を代表する大店であった駿河町「越後屋」の「丸に井桁三」の三井の暖簾が架かる町角と、通り越しの富士山は江戸名所としてセットで好んで描かれた。浮世絵が江戸土産でもあったことを示す事例である。
三井高利が1673年に江戸で「越後屋」を出店したのは現在の本町一丁目（現・日本銀行本店新館の場所）であった。大火により1683年に駿河町に移転した。

描かれた商いと描かれていない商い

同じ越後屋前を描いた絵画資料だが、角の越後屋と木戸の間に商番屋が描かれている。展示中の浮世絵も含め、越後屋前を描いた絵画には商番屋が描かれていない作品もある。
防災・防犯などの自治機能を持った番屋は、江戸の町ごとに設けられ、草鞋などの日用品の商いも行っていた。



『黒代勝寛』より駿河町 Staatliche Museen zu Berlin蔵



901582

薬種問屋の店前

歌川芳玉「江戸出店図」
本町四丁目日野屋孫太郎」1860年代

本町四丁目の薬種問屋日野屋が宣伝のために製作した。日本橋の本町三・四丁目は薬種問屋が多く集まっていた。
江戸期の「本町四丁目」は現在の本町2・3丁目。

日野屋
人參大乘圓
のチラシ
明治時代



911883



『江戸名所図会』1 NDL蔵

薬種問屋「鰯屋」の店頭

『江戸名所図会』には、本町の薬種店として、「鰯屋」の店頭の様子が描かれる。店舗には「いわしや」「鰯屋」と書かれた暖簾、人気商品「調痢丸」などの看板が掛けられている。

薬種問屋「鰯屋」の商品リスト

「薬種卸惣本店いわしや」(引札)

本町三丁目にあった薬種問屋「鰯屋」の引札(チラシ)。目印の看板にも大きく書かれた「調痢丸」などの薬剤と香の商品が一覧できる。



『日本橋北内神田両国浜町明細絵図』より 902431

伊勢屋の商品券

鯉節の銀製商品券 複製
(株)にんべん蔵、1830年代
日本橋で鯉節を商っていた6代目伊勢屋高津伊兵衛が天保期に発行した銀製の商品券。記載された金額と同額分の鯉節と交換できた。
紙の商品券に変わっていくが、1699年創業の老舗の信用が支え広く普及した。伊勢屋の商品券は、広く普及した商品券としては、比較的前期のものと言われる。

行く雁
来る燕



春の季語「去る雁」「燕来る」を、代金が前払いされる「切手」=商品券の動きになぞらえ、詠んでいる。



「東京自慢名物会 鯉節商 伊勢屋高津伊兵衛」
1896年 東京都立図書館蔵



裏

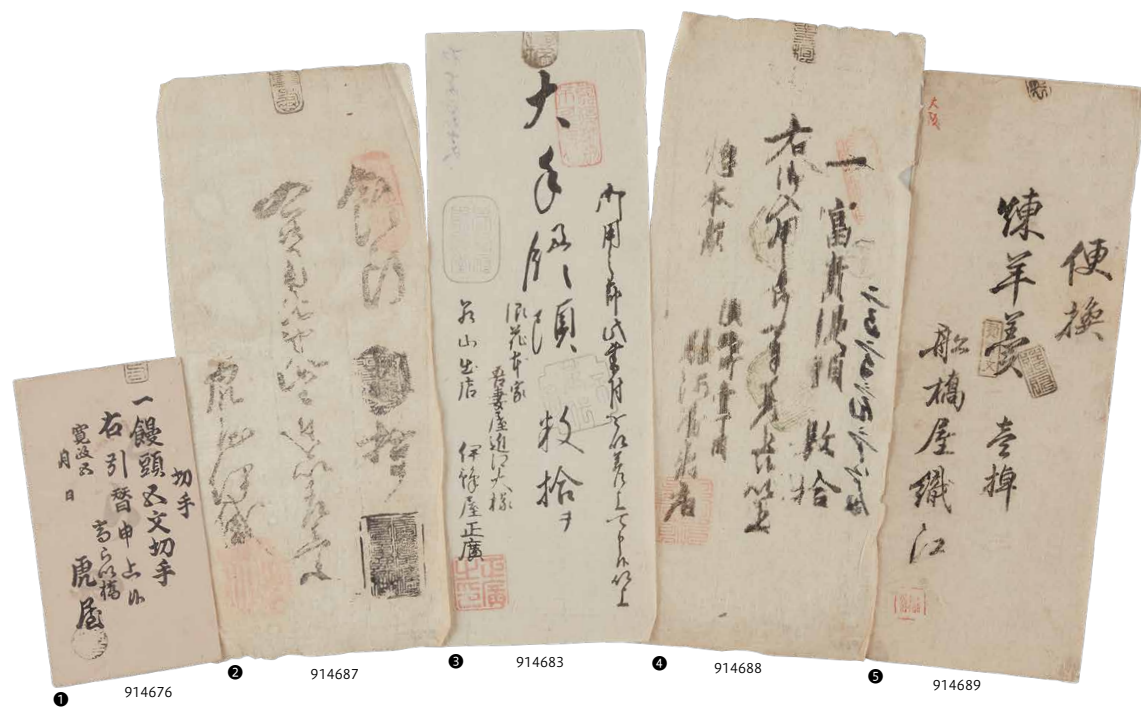


紙の商品券 (株)にんべん蔵、明治時代
6代目高津伊兵衛は、銀製商品券の信用が整ったところで紙の商品券へと変更し、その後も紙の商品券が継続的に発行された。素材を貨幣の材料である銀から紙に変えることで、代金が前払いされ、資金調達がしやすくなった。

軽くて持ち運びやすい 贈答に便利な商品切手

商品切手は店が取り扱う商品と交換できる券で、現在の商品券にあたる。

代金前払いで、必要な時に商品と交換できる。菓子や酒、豆腐など日持ちのしない商品を中心に、贈答に好んで使用された。江戸時代には大坂など上方で多く使われた。



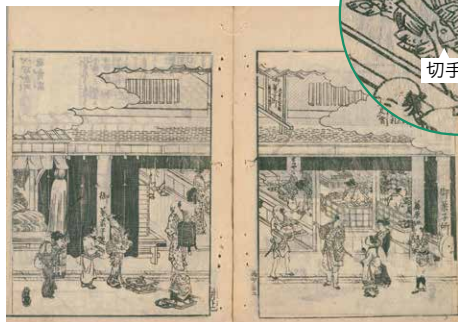
- ① 饅頭5文
虎屋伊織
1793年
- ② 饅頭10個
虎屋伊織
江戸時代
- ③ 大手饅頭10個
伊豫屋正廣
江戸時代
- ④ 富貴饅頭10個
駿河屋出店
江戸時代
- ⑤ 煉羊羹1棹
船橋屋織江
江戸時代

日持ちのしない菓子の切手

江戸時代

大坂では高麗橋虎屋伊織の「饅頭五文切手」が商品切手の始まりと言われている。
伏見駿河屋の「羊羹切手」も江戸中頃より見られる。

饅頭切手発祥の店 虎屋伊織



『編津名所圖會』4 NDL蔵



淡路町駿河屋の店前

「煉羊羹切手」はどの店でも同様に扱い商品と引き換えると記してある。



『増補浪速買物独案内』関西大学にわ大阪研究センター蔵



- ⑥ 生諸白1升預
和田
江戸時代
- ⑦ 上諸白1升
和田
1813年
- ⑧ 銘酒 瀧水1升
四方太助



酒切手の版木

江戸時代



- ⑨ 御三人様会席御膳
田川駐春亭幸治郎
- ⑩ 鰻1うつつ(価半円)
東呉
明治時代以降
- ⑪ 寿し(金二朱)
高砂
- ⑫ 鯛500目預(代銭300文)
大黒屋忠八
- ⑬ 生肴1折
安満利

酒の切手

江戸時代

酒切手は、酒造が盛んな上方で多くみられた。
酒は重いため、贈答の際に持運びに簡便な切手が好まれた。



酒切手には酒の銘柄が書かれている場合と、「生諸白」など酒のランクが書かれている場合がある。諸白は精白した米でつくる上等な酒。

江戸の酒

酒の名産地は上方に多く、江戸で消費される酒も上方からの「下り酒」が大半であった。

有名な江戸の地酒
内田屋の「宮戸川」、山屋半三郎の「隅田川諸白」、四方の「瀧水」など



「新板大江戸名物双六」より部分
東京都立図書館蔵

様々な商品切手

江戸時代

商品切手には、めでたい絵柄が施されたものも多く、ご祝儀の贈答用に使われたことがわかる。
慶事に好まれる鯛などの生魚や寿司などに加え、有名会席料理店の食事に換えられる切手もあった。

戯作者と商売

戯作者たちは、物語の執筆の傍らで、店舗や商品の宣伝文を書いていた。

また、作家自身が小間物屋や薬局などの店舗を営み、著作の巻末には、店や商品の紹介、新刊の出版情報を掲載し、宣伝をしていた。



901203

戯作者が文を書いた 小間物問屋の引札

「伏栗(栃屋栃兵衛)」

式亭三馬の子息・小三馬による宣伝文、歌川国芳の絵を入れた引札。小間物問屋・稲葉重蔵が栃屋栃兵衛と改名して開店する機会に作らせたものである。

式亭三馬：1776-1822 代表作『浮世風呂』など

ユーモアあるコピー 戯作調の宣伝文

江戸後期～明治初頭にかけての引札には、平賀源内を始め、仮名垣魯文、河竹黙阿弥といった作家たちが引札の文章を書いていた。店主によるあいさつ等が中心の引札よりユーモアのある引札は、人々の注目を集めた。

式亭三馬のドラッグストア

式亭三馬・小三馬親子が日本橋本町に営んでいたドラッグストア(薬・化粧品小売業)の店頭をみると「式亭正舗」、「延寿丹」と記された暖簾や、「式亭三馬製」と書かれた化粧水「江戸の水」の看板がかかる。

式亭三馬は、著書『浮世風呂』の登場人物に、店で扱う商品名のほか店名や所在地、薬や化粧品の効能についても説明させた。こうした宣伝効果もあり、店は繁盛した。



式亭三馬
『江戸水福話』3
NDL蔵

式亭三馬の店で扱う化粧品の名前と金額が載せられた宣伝用の双六。商品を買うと景物(商品のおまけ)を進呈するサービスを展開していた。「江戸の水」の購入者には、双六や黄表紙『版式亭福ばなし』を景物本として配布した。



式亭小三馬作 歌川国輝画「初商出世双六」1854年 東京都立図書館 蔵



904499

巻末で 版元を宣伝

十返舎一九『新鑄小判耳たぶ』1795年

宣伝 巻末で、版元の蔦屋重三郎の本問屋「耕書堂」と金に捕まった作者が描かれる。

本編 小判を擬人化して人間と「お金」の関わりを説明した黄表紙。
十返舎一九：1765-1831 代表作『東海道中膝栗毛』など



904477

巻末で 新作を紹介

曲亭馬琴『錢鑑貨写画』1800年

宣伝 巻末で、馬琴の新作『戲子名所図会』を宣伝している。

本編 人間の欲と銭の世界を垣間見た人がまじめになっていくという黄表紙。
曲亭馬琴：1767-1848 代表作『南総里見八犬伝』など



904575

巻末で 自分のお店を紹介

山東京伝『平仮名銭神問答』ほか

宣伝 山東京伝は、商人・京屋伝蔵として商いに力を入れていた。巻末で、銀座にあった京伝の店「京屋」で扱う商品を紹介している。特に京伝自身が作った「読書丸」という薬は、何度も掲載されている。

山東京伝：1761-1816 代表作『人間一生胸算用』など

山東京伝の店舗「京屋」

山東京伝の店舗ではキセルや煙草入れ、鼻紙袋などを扱っていた。京伝がデザインしたものは「京伝好み」と呼ばれ人気があった。店には、吉原の遊女や人気歌舞伎役者が来ていた。京伝自身の姿が、錦絵右奥に描かれている。

戯作とは

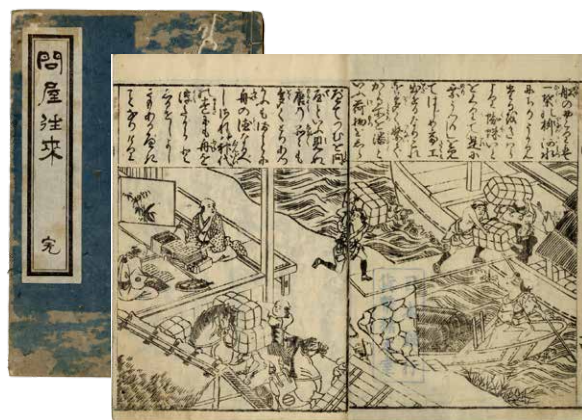
江戸中期～明治初頭までに作られた娯楽を主とした通俗文学。18世紀半ば以降の談義本・洒落本・読本・黄表紙、18世紀後半～19世紀初頭以降の滑稽本・人情本・合巻などがある。



歌川豊国「山東京伝の見世」東京国立博物館 蔵 ColBase

立派な商人になるために —知識と心得—

商人を目指す人々は、読み書きや算術の能力が必要とされた。また、商人として必要な心がまえや教養を身につけるための書物が出版され、商家における教材として使用された。



904472



905200

問屋の言葉から読み書きを学ぶ

『問屋往来』1794年版

問屋に必要な語句や心得を集めた手習い用テキスト。巻頭に問屋や荷船の図を掲げ、一通の手紙文に見立てて諸国の港や問屋の取引商品名などを記す。本文には、行書にふりがなが付けられている。

海外貿易も加わったテキスト

橋爪貫一『世界商賣往来』1871年

商売に関する手習い用テキスト(商売往来)。貿易の観点から国名・地名・機械・物品などの語句を集めた語訳や図解とともに英語とカタカナが記される。

商売往来の誕生

寺子屋や家庭で使用された読み書きの学習書(往来物)のうち、商業活動に必要な語彙や心得を集めた「商売往来」が1694年に生まれた。その後、江戸時代を通じて、増補本や絵入り本など数多くの商売往来が出版された。

狭川半水 訂校、長谷川貞信 画図
『商賣往来繪字引』
京都大学附属図書館 蔵



903632

算術の基礎を学ぶ本

吉田光由『新篇塵劫記大全』

江戸時代の算術書。算盤によるかけ算・わり算、金・銀・銭貨の売買両替、利子、米・絹・木綿の売買などが問題とともに記される。また、枡などの日常生活に必要な知識についても説明されている。



903634

算術の基礎知識と問題集

井上昌倫『峽算須知』1793年

大数や小数の表現、度量衡の単位、金・銀・銅・錫など金属の重量、算盤による計算、相場をテーマにした問答など、算術に必要な基礎知識が記される。



『商人生業鑑 絵入』一(呉服屋) 905198



『商人生業鑑 絵入』二(薬屋) 905199

心得を学ぶ本

岩垣光定『商人生業鑑 絵入』1757年

商人の心得などを書いた教訓書。商人の経営の指針を示しつつ、生活態度や心がまえ(倅約とケチの違い、善は急げ、百聞は一見にしかず、大欲は無欲など)を説いている。

商人と読書・学習

17世紀末以降、浮世草子や教訓書、人生哲学等を説いた心学道話など、様々な書物が出版され、商人が読書をする機会が増えた。鴻池、三井などの大きな商家では、子どもたちに算筆の稽古をさせることが家訓になっていた。こうした学習は、商家を継ぐ者以外の奉公人へも奨励された。

井原西鶴『日本永代蔵』1 NDL蔵

